

シンポジウム 12：看取りに必要な「言語」と「行動」

| | |
|------------|----------------|
| 演題名 | 援助をわかりやすい言葉にする |
|------------|----------------|

概要

多死時代を迎え、急性期病院から地域で看取りを担う必要があります。ITを使った情報共有や顔の見える関係は大切です。しかし、“日に日に弱っていく人と、どのように関わって良いかわからない”という思いがあれば、地域で看取りに対応していくことは困難になるでしょう。永年、緩和ケアを学んできた専門職として、“援助をわかりやすい言葉にする”ことが現場で必要であると考えています。

では、何をしたら援助になるのでしょうか？雨具がなくて困っている人に傘を貸すような援助ならば、イメージはつかみやすいでしょう。しかし、まもなくお迎えが来る人に対しての援助となると、誰でも言葉にすることはできません。

そこで、どこを触ると良いのか？という意識を持つようにします。皆さんは、熱い鍋を移動するときどこを触りますか？熱くない取っ手を持ちます。同じように、終末期の患者さんでも、触って良いところがあります。どこを触って良いかを知る方法は単純です。顔の表情を見ることです。雨具がなくて困っていて傘が与えられたとき、顔の表情が笑顔になり、穏やかになっていきます。苦しみを抱えた人が、援助を受けるということは、顔の表情が笑顔になり、穏やかになることである、と意識できたならば、どんな状況であったとしても、関わる可能性が見えてきます。

穏やかになる条件は、一人一人異なります。ある人は巨人が勝つと穏やかになります、ある人は巨人が負けると穏やかになります。大阪に住んでいる人がみんな阪神ファンとは限りません。終末期であったとしても同じです。ある人は終末期でも、定期的な採血や画像検査を受けることが安心と穏やかになります。ある人は、最期まで徹底抗戦することが穏やかになります。ある人は、痛みがなく、家族がそばにいて、住み慣れた自宅で過ごすことが穏やかになります。この穏やかになる条件こそ、その人にとっての“支え”です。この穏やかになる支えを言葉としてキャッチできること、その支えを応援することができるのであれば、私たちは、日に日に弱っていく人であったとしても、職種を越えて援助を言葉にする力を持つでしょう。支えをキャッチすることも、強めることも、ともに訓練が必要です。しかし、一部のエキスパートのみが行える援助ではなく、苦しむ人の力になりたいと願う全ての人を持つ可能性です。

参考文献 小澤竹俊の緩和ケア読本 日本医事新報社